

衛生技術学科入学者の高校評点, 入学試験成績と入学後の学業成績の関係 —入学者選抜, 教育方法の改善に向けた自己点検・評価(1)—

岡本 基 崎山順子 赤塚和也¹⁾

要 約

1987年4月から1995年4月の9年間に衛生技術学科へ入学した361名を対象に, 高校評点, 入学試験(学力試験)成績と, 入学後の学業成績, 退学, 留年, 臨床検査技師国家試験との関係を調べた。

1) 入学者総数は361名で, このうち留年者が39名(10.8%), 退学者が18名(5%)であった。退学者の中には, 実質入学辞退者が6名, 4年制大学へ進路を変更した者が4名いたが, こうした退学者は1992年度までの入学者に多かった。

2) 入学者全体では, 予定卒業者, 留年者, 退学者の間で高校評点, 入学試験成績には差がなかったが, 入学年度ごとにみると, 1987, 1988年度は留年者が予定卒業者に比べて入学試験の総得点が高い傾向があり, 逆に1991年, 1993年度は予定卒業者に比べて有意に低かった。

3) 高校評点は, データが入手できた1991年度以降一貫して留年者の評点が予定卒業者より低く, とくに1991年, 1993年度は留年者の評点が有意に低かった。

4) 留年者も含めて, 一般教育科目の成績と専門科目の成績との間に有意な正の相関がみられた。

5) 高校評点と入学試験成績との間には軽度の相関しかみられなかったが, 高校評点および入学試験総合点は入学後の一般教育科目, 専門科目の成績と高い正の相関を示した。

6) しかし, 個々の入学試験科目の得点は, 入学後の成績と相関しないか, 軽度の相関しかみられなかった。

7) 国家試験不合格者は, 高校評点, 入学試験総合点, 一般科目平均点, 専門科目平均点のいずれも合格者に比べて得点が低かったが, 有意差はなかった。

以上の結果から, 短期大学部開設当初は留年者, 退学者の中に予定卒業者より学力のある学生がいたが, 年を追うごとに入学者の学力が均質化し, 学力が不十分なために留年する学生が多くなってきていると言える。一般教育科目の成績と専門科目の成績が強い正の相関を示すことは, 1年次の成績がそのまま2, 3年次の成績に反映されることを示しており, 入学当初の動機付けと勉学意欲の喚起が重要なことを示している。高校評点や学力試験の成績は入学後の成績とよく相関しており, 学生選抜の有効な指標であると考えられたが, 各入試科目との相関は乏しかったことから, 個々の試験科目の問題内容については改善すべき課題があると思われた。

キーワード: 高校評点, 入学試験成績, 入学後の学業成績, 留年, 退学

はじめに
いま大学は, 大衆化と多様化の時代を迎えてい

る。18歳人口の減少と大学進学率の上昇により,
2010年には進学希望者のほとんどが大学か短大へ

岡山大学医学部保健学科検査技術科学専攻

1) 福山臨床検査センター

入学できるようになると予想される。入学者選抜方法が多様化し、推薦入試、専門高校・総合学科特別選抜、社会人特別選抜等の特別選抜を実施する学部、学科が増えつつあり、中等教育の多様化とあいまって高校で異なる科目を履修した学生が入学してくる。大学設置基準が大綱化されて、各大学がそれぞれの教育理念と目標に沿って自由なカリキュラムを編成し、運用できるようになったが、教育目標を達成するには学生選抜、カリキュラムの編成・運用にこれまで以上の工夫が必要である。

衛生技術学科には臨床検査技師を目指す学生が入学してくるが、臨床検査は科学技術の進歩が即座に反映される領域であることから、短大開設当初から日常業務の中で自ら問題を発見し解決でき、ニーズの変化や急速な科学の進歩に即応できる人材の育成を目標にしてきた。このため、一定水準の能力をもち、かつ医療人としての適性を備えた学生を確保し、自己学習能力育成を目指した教育を行ってきた。しかし、大学が大衆化する中で、3年制短大教育でこの目標を達成するのは不可能であると考え、4年制教育課程設置に向け、全学をあげて取り組んできた。幸いにして、1998年10月から医学部保健学科がスタートしたが、保健学科の学生選抜や教育に短期大学部での経験を生かすためにも、短期大学部で行ってきた入学者選抜、教育を分析してみる必要があると考えた。卒業研究の立案やまとめ方から、開設当初と比較して学生の理解力や応用力が少しずつ低下してきている。また、高校評点や入学試験の成績と入学後の成績が相関しない印象があり、臨床検査技師になるという目的意識をはっきり持った学生を入学させたほうがよいと考えて、1997年度入学者から定員の2割を推薦で選抜するようにした。しかし、データを詳しく分析してみると、印象とは異なる結果が出ることは学術研究においてしばしば経験するところであり、日頃の印象が事実かどうか確認することも本研究の目的のひとつである。

入学者選抜が適切であったか、入学後の教育が教育理念・目標を達成するうえで効果的に行われたかは、卒業生が5年後、10年後に医療人として

どういった生活を送っているかをみなければ正確には判断できない。岡山大学医療技術短期大学部は、1987年4月に1期生を迎え入れ、1998年3月に9期生が卒業したばかりで、卒業後の追跡調査を行うのはやや時期尚早である。しかし、入学してきた学生が期待どおり医療技術者になるための基礎学習に取り組めたかどうかを、高校評点や学力試験との関係から分析するのも、選抜方法や教育方法改善の参考になるであろう。そこで、本研究ではこれまで衛生技術学科へ入学し、卒業していった学生を対象に、高校評点、入学試験の成績と入学後の成績、留年、退学、臨床検査技師国家試験との関係を分析した。

研究 方 法

衛生技術学科の定員は40名であり、対象は1987年4月から1995年4月の9年間に衛生技術学科へ入学した361名である。これらの学生について、高校時代の評点、入学試験（学力試験）の成績と、入学後の学業成績、退学、留年との関係を調べた。高校時代の評点は、4期生以前の資料が入手できなかったため5期生（1991年度入学）以後の入学生についてのみ分析を行った。入学後の学業成績は、学籍簿に記載されている最終評価点をもとに分析した。留年者の場合、単位が取得できなかった時の点数を分析対象にしたほうが正確に実態が掴めるが、すべての留年者について担当教官から情報を得るのは困難であり、データが不均一になるので学籍簿に記載された最終評価点を分析対象にせざるをえなかった。

入学試験の科目は、国語100点、数学（数学Ⅰ・代数・幾何・基礎解析）200点、英語100点、理科（化学必修、物理と生物から1科目選択）200点の計600点満点で、学力試験のほかに面接を行っており、今回分析対象とした入学生については受験科目や点数配分の変更は行われていない。専門科目はすべて必修で、新しい指定規則が適用された1987年から本学がスタートしたこともあって、分析対象期間中大きな変更はないが、1990年度入学者からいくつかの専門科目を分割して別個に評価しているため、科目数が増えている。このため、

表1 入学年度別の入学者、留年者、退学者数

| 入学年度 | 1987年 | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 | 1992年 | 1993年 | 1994年 | 1995年 | 合計 |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| 入学者 | 40 | 39 | 40 | 39 | 45 | 40 | 40 | 38 | 40 | 361 |
| 留年者 | 3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 4 | 7 | 11 | 4 | 39 |
| 退学者 | 1 | 1 | 3 | 5 | 3 | 2 | 0 | 2 | 1 | 18 |

表2 入学者の入学試験（学力試験）成績

| | 高校評点 | 国語 | 数学 | 英語 | 理科 | 総合点 |
|---------------|-------------------|-----------|------------|-----------|------------|------------|
| 入学者全体 (n=361) | 4.09±0.4 (n=203) | 62.3±11.4 | 139.8±24.2 | 65.2±11.9 | 144±19.2 | 411.3±26.9 |
| 予定卒業生 (n=304) | 4.14±0.39 (n=166) | 62.3±11.5 | 140.6±23.6 | 64.5±11.8 | 144.1±18.7 | 411.5±26 |
| 留年者 (n=39) | 3.92±0.41 (n=29) | 61.4±11.8 | 138.5±24.4 | 68±12.3 | 142±20.9 | 410±27.6 |
| 退学者 (n=18) | 3.96±0.44 (n=8) | 65.2±9.1 | 129.1±32 | 71.7±9.5# | 145.9±24.2 | 411.8±39.7 |

表の数値は平均値±標準偏差。高校評点は1991年度以降の入学者の平均値を示す。

国語、英語は100点満点、数学、理科は200点満点。

#：予定卒業生と比較してP<0.02 (Student's t-test)

表3 入学年度別高校評点と入学試験（学力試験）成績

| 入学年度 | 1987年 | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 | 1992年 | 1993年 | 1994年 | 1995年 |
|-------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 高校評点 | | | | | | | | | |
| 入学者全体 | | | | | 4.0±0.5 | 4.19±0.4 | 4.05±0.3 | 4.09±0.36 | 4.15±0.36 |
| 予定卒業生 | | | | | 4.05±0.49 | 4.22±0.39 | 4.08±0.3 | 4.16±0.37 | 4.16±0.36 |
| 留年者 | | | | | 3.4±0.2# | 4.0±0.51 | 3.77±0.3# | 3.97±0.34 | 3.93±0.22 |
| 退学者 | | | | | 4.07±0.67 | 3.8±0.28 | | 3.75±0.21 | 4.4 |
| 入試総合点 | | | | | | | | | |
| 入学者全体 | 407.8±17.5 | 422±21.5 | 402.2±32.7 | 406.7±27.3 | 399.6±27.2 | 403.8±26.4 | 424±28.4 | 425.4±21.6 | 411.2±23.2 |
| 予定卒業生 | 407.2±16.2 | 421.1±21.5 | 401.7±27.4 | 46.8±25.4 | 402.5±27.3 | 401.9±27.1 | 425.9±28.4 | 424.8±21.6 | 411.8±24.2 |
| 留年者 | 412.7±34.1 | 433.3±35.7 | 372 | 409.5±8.1 | 368±6.0★ | 416.5±16.4 | 400.4±13.2★ | 427.3±24.2 | 403±16.6 |
| 退学者 | 425 | 400.5 | 417.7±83.4 | 416.8±47.5 | 393.7±17.6 | 402.5±33.2 | | 422 | 420 |

数値は平均値±標準偏差

#：予定卒業生と比較してP>0.02 (Mann-Whitney's U-test and Student's t-test)

★：予定卒業生と比較してP>0.001 (Welch's t-test)

成績の分析は総合点ではなく、平均点で行った。一般教育科目については、1990年度以降年度によって開講科目が多少異なり、学生が選択した科目に違いがみられたので、一般教育科目と専門科目は別個に評価した。退学者については、入学後の成績が一部しか出ていないので、入学後の成績との相関は分析できなかった。

統計学的有意差の検定は、nが4以上の場合はF検定の結果によって Student's t-test、または、分散が等しくないと仮定した2標本による t 検定 (Welch's t-test) によって行い、一方の群の n が 3 以下の場合は Mann-Whitney's U-test により行った。相関の分析はすべて回帰分析によって行った。

結 果

1) 入学者の高校評点と入学試験（学力試験）の成績

表1に、入学年度ごとの入学者、留年者、退学者の数を示した。入学者の総数は361名で、このうち留年者が39名、退学者が18名であった。退学者の中には、入学手続きはしたものの、実際には本学へ来なかった実質辞退者が6名、途中医学部や教育学部に進路を変更した者が4名いた。その他は、死亡、病気、学校への不適応、個人的事情等による退学であった。1993年度と1994年度入学者に留年が多いのは、一般教育科目で同一の必修科目の単位が取れなかった学生が多数出たため、表3からも分かるように、この2つの学年の成績がとくに悪かったわけではない。

表2に、全入学者（以後入学者とする）と、そのうち予定どおり卒業できた者（以後予定卒業者とす）、留年者、退学者の高校評点、入学試験各科目の得点と総合点を示した。表3には、入学年度ごとに入学者、予定卒業者、留年者、退学者の

高校評点と入学試験の総合点を示した。また、図1、図2には入学者の高校評点と入学試験成績の最高値と最低値を、予定卒業者と留年・退学者に分けて年度ごとに示した。

入学試験では、予定卒業者の英語の得点が留年

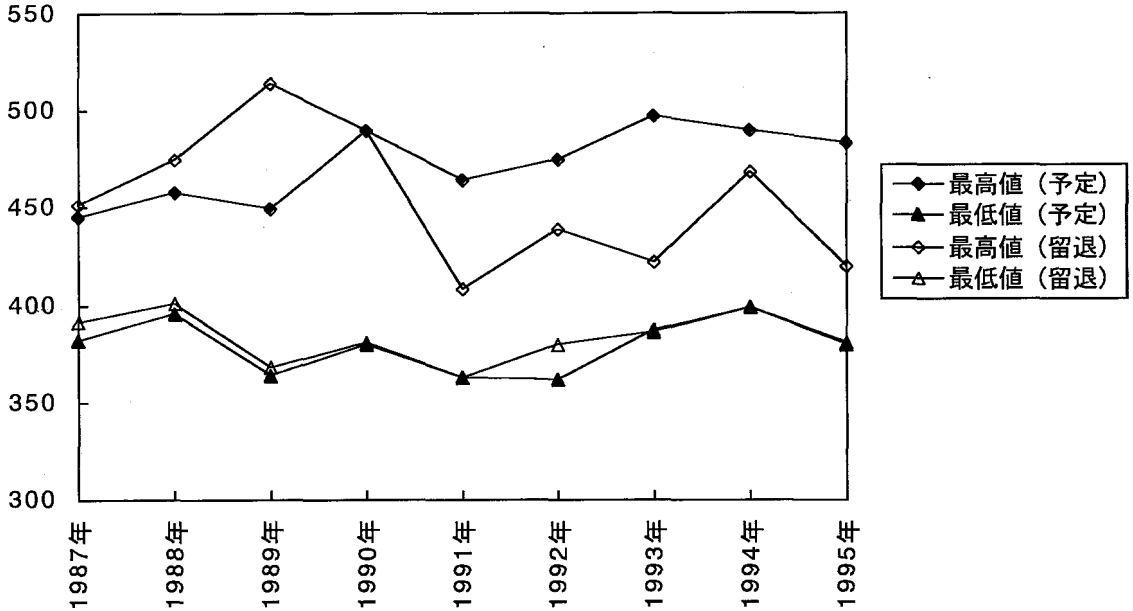


図1 入学試験成績の最高値と最低値の年次推移
 予定：予定卒業者、留退：留年者または退学者

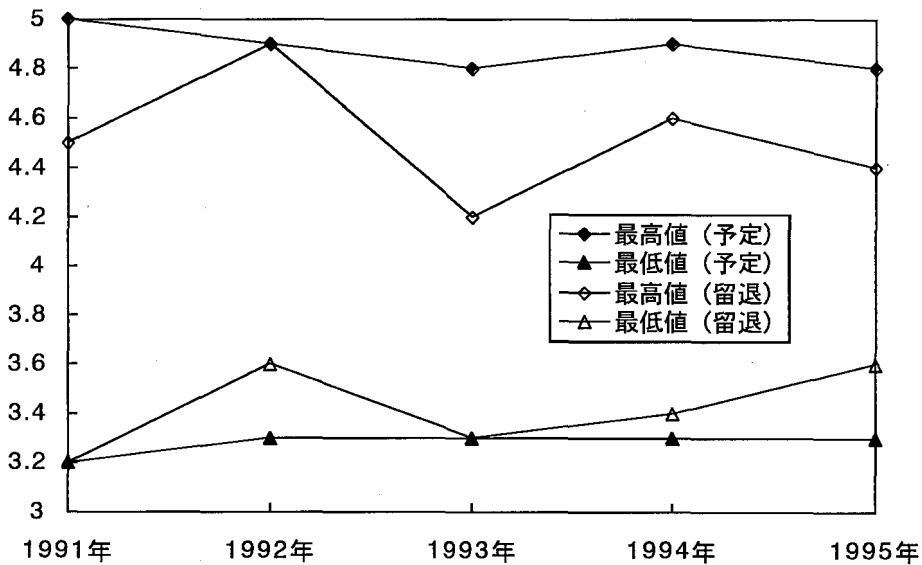


図2 高校評点の最高値と最低値の年次推移
 予定：予定卒業者、留退：留年者または退学者

者より低かった以外は、予定卒業者、留年者、退学者の間で各科目の得点および総合点の平均値に差がなかった。高校評点は留年者、退学者が予定卒業者より低い傾向がみられたが、統計学的には有意差がなかった(表2)。しかし、入学年度ごとにみると、1989年、1991年、1993年、1995年度は留年者の入学試験の総得点が低い傾向があり、1991年、1993年度入学生は予定卒業者に比べて有意に低かった。他の入学年度は予定卒業者と差がないか、むしろ高い得点であった(表3)。高校評点は、データが入手できた1991年度以降一貫して留年者の評点が予定卒業者より低く、とくに1991年、1993年度は、留年者の評点が有意に低かった(表3)。入学試験成績の最高値、最低値の推移をみると、1990年度入学生までは留年者、または退学者が最高得点(具体的には1987、1988年度は留年者、1989、1990年度は他の大学へ進路変更した退学者)であったのに対し、1991年度以降は予定卒業者が最高得点であった(図1)。いっぽう、最低得点は1990年までは予定卒業者であったが、1991年、1993年、1994年度は留年者か退学者の中に最低得点の者があった(図1)。高校評点は、データが得られた1991年度以降わずかず最高値と最低値の幅が狭くなる傾向がみられた。また、1992年度には退学者の中にも最高値を示した者がいたが、それ以外は予定卒業者が高校評点の最高値を示した(図2)。

留年者、退学者の高校評点と入学試験総合点の分布をみると、いずれについても得点の高い入学者と低い入学者が混在していた(図3、図4)。図には示さなかったが、留年者と退学者を分けて別々にみても、結果は同じであり、留年者、退学者のいずれにも入学者全体の平均よりも高校評点や入学試験得点が高い者と低いものが混在していた。しかし、表3からも明らかのように、年次推移をみると留年者の高校評点と入学試験総合点は予定卒業者に比べて低くなる傾向がある。1995年度入学者までの退学者は18名であり、このうち実質入学辞退者が6名、医学部や教育学部を受験して進路を変更した者が4名いた。このうち、高校評点か入学試験成績でその年度の入学者の最高値

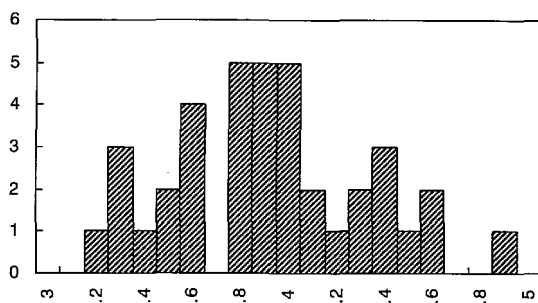


図3 留年者、退学者の高校評点
横軸に評点、縦軸に各評点ごとの入学者数を示した。

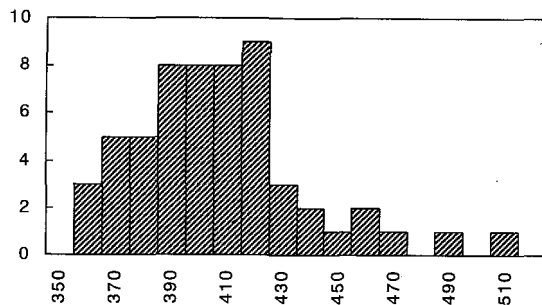


図4 留年者、退学者の入試総合点
入試総合点を10点ごとに分け、各点数ごとの入学者数を縦軸に示した。

を示した者が、1992年度までの6年間に5名いた。図3、図4で高い点を示しているのはこれらの入学者である。逆に、高校評点か入学試験成績がその年の入学者の最低値であった者も3名あり、すべて1991年以降の入学者であった。これらを要するに、短期大学部開設当初は留年者、退学者の中に予定卒業者より学力のある学生がいたが、年を追うごとに入学者の学力が均質化し、学力が不十分なために留年する学生が多くなってきていると言える。

2) 入学後の成績と高校評点、入学試験成績との関係

次に、入学後の成績を高校評点、入学試験成績との関係を中心に分析してみた。表4に、入学後の成績を示したが、一般教育科目、専門科目の平均点、全体の平均点のいずれも予定卒業者より留年者のほうが低かった。これは当然のことであるが、研究方法で述べたように留年者の場合最終的に単位を取得できた時の点数を用いているので、

表4 入学後の成績

| | 一般教育科目 | 専門科目 | 全科目 |
|---------------|----------|----------|----------|
| 入学者全体 (n=338) | 78.3±3.5 | 78.1±4.1 | 78.2±3.4 |
| 予定卒業生 (n=304) | 78.5±3.4 | 78.4±4.0 | 78.5±3.3 |
| 留年者 (n=34) | 76.1±3.7 | 75.3±3.9 | 75.7±3.4 |

数値は平均値±標準偏差

対象は全入学者から退学者18名と未卒業の留年者5名を除く338名である。

留年者：未卒業の5名は除外してある。

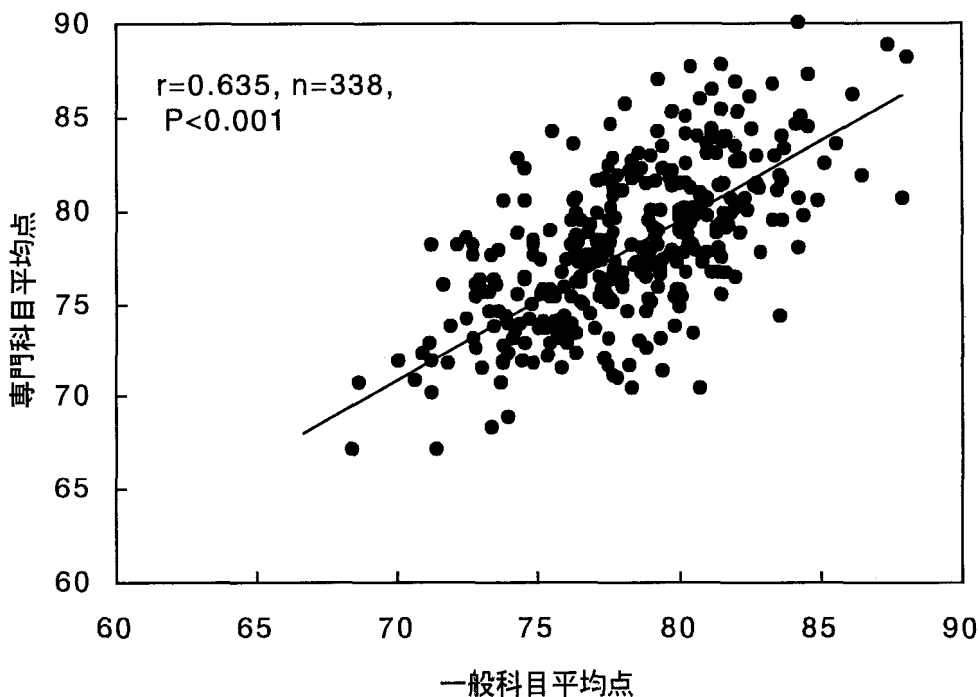


図5 一般科目の成績と専門科目の成績との相関

1回目の試験の成績を用いた場合は表に示した点数よりはるかに低いと考えなければならない。また、1990年度までの入学者には高校評点や入試総合点が予定卒業生より高いにもかかわらず、入学後の成績が極端に悪い者がいたが、1991年度以降入学者の中には、高校評点や入試総合点の差以上に予定卒業生より入学後の成績が低い者がいたことを示している。留年者も含めて（まだ卒業していない5名は除く）一般教育科目の成績と専門科目の成績との間に有意な正の相関がみられた（図5）。一般教育科目は主として1年次、専門科目は2、3年次に開講されるので、この結果は1年次の学業成績がそのまま2、3年次の成績に反映さ

れることを示している。

図6は、1991年度から1995年度の入学者（この間の入学者は203名である）について、高校評点と入学試験の成績との関係を示したものである。図から明らかなように、入学試験成績は高校評点と正の相関を示したものの、相関の程度は低かった。これは、高校評点に学校間格差があることにもよると思われるが、図7、図8に示したように、高校評点と入学後の一般教育科目、専門科目の平均点との間にはより高い正の相関がみられたことから、学校間格差はあっても、高校評点はある程度入学者の学力を反映していると考えられる。本学では、共通一次試験、入試センター試験は課して

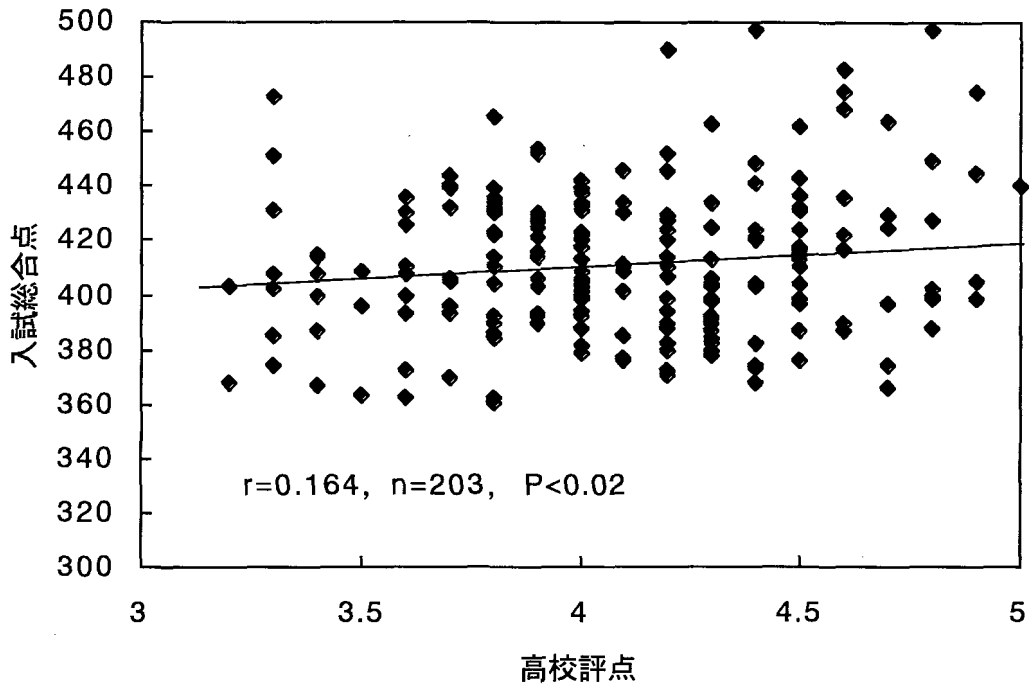


図6 高校評点と入試成績との相関

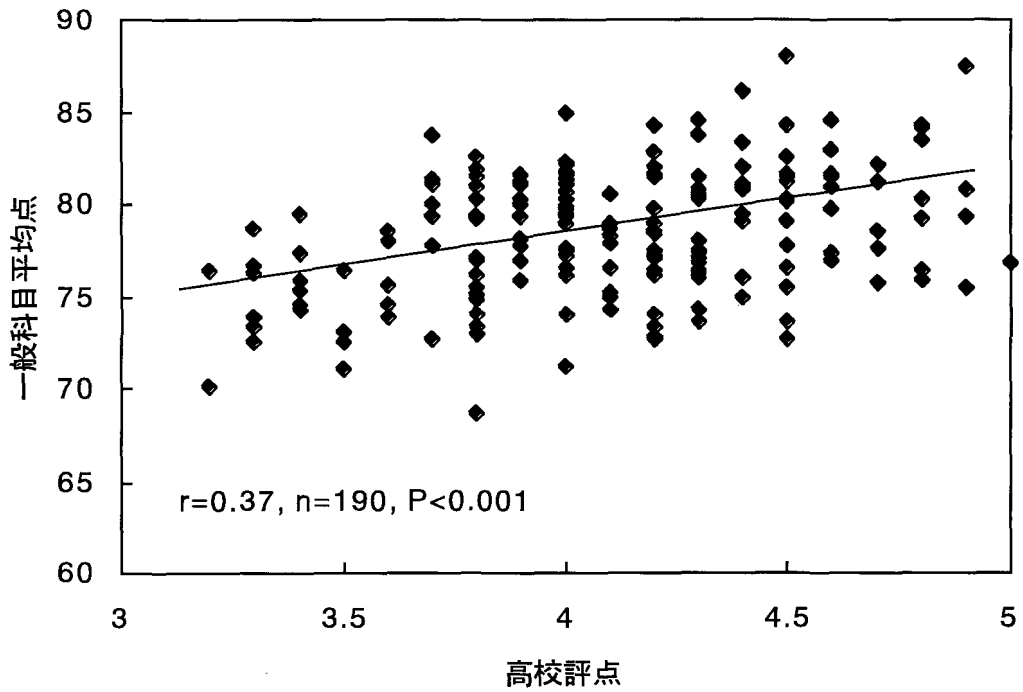


図7 高校評点と一般科目の成績との相関

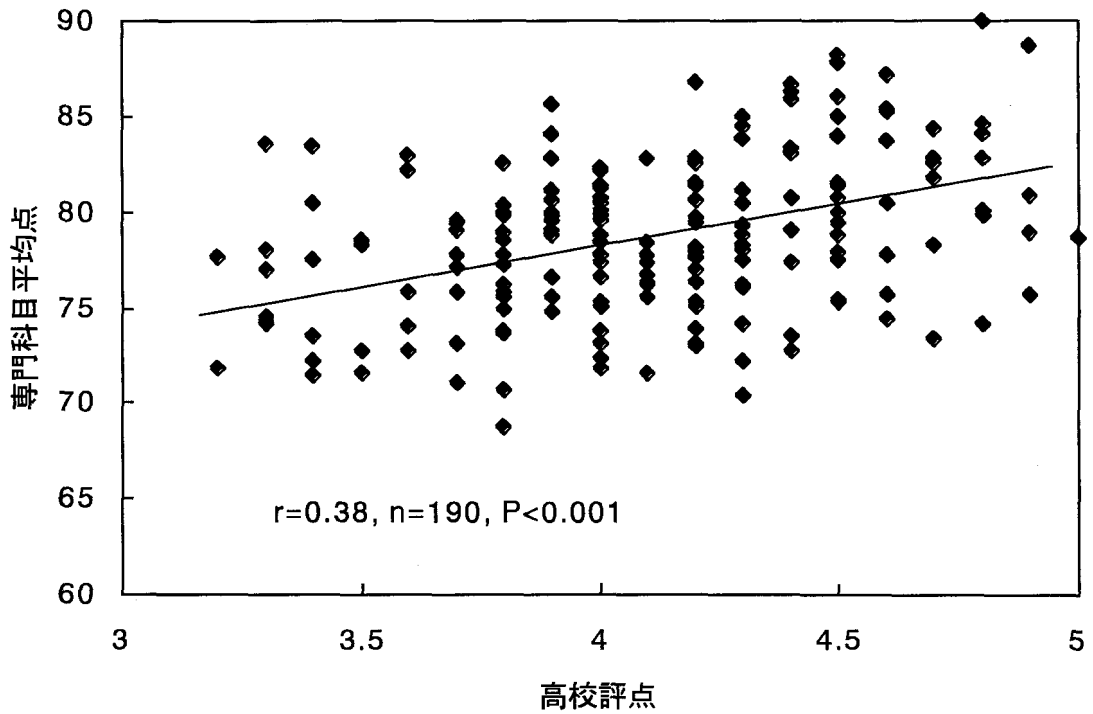


図8 高校評点と専門科目の成績との相関

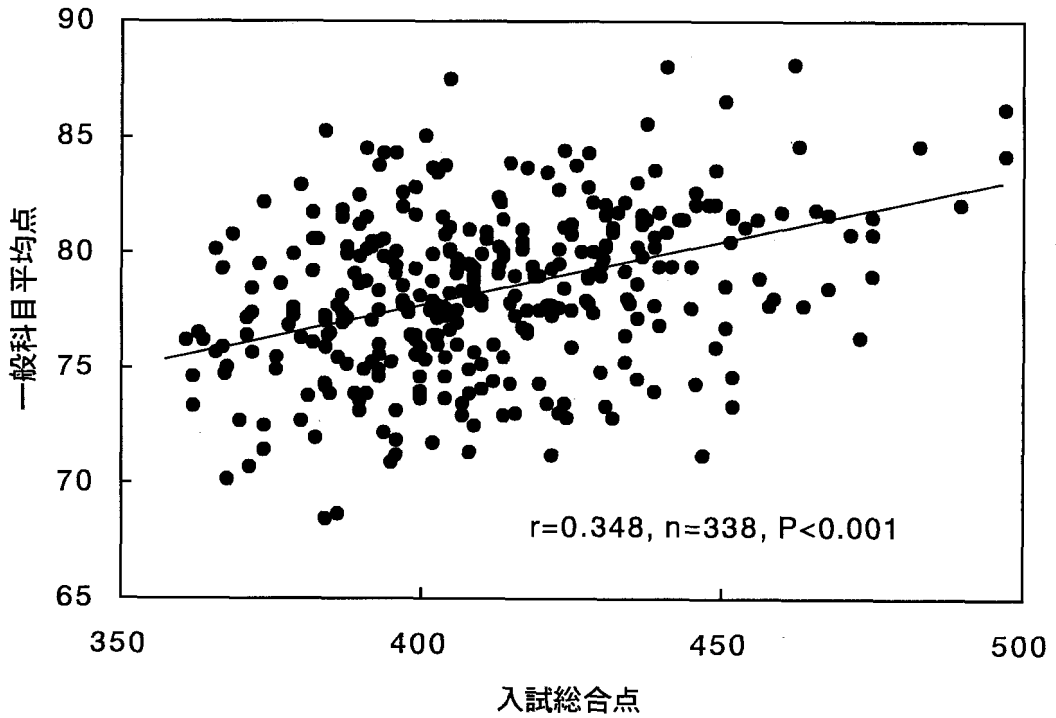


図9 入試総合点と一般教育科目の平均点との相関

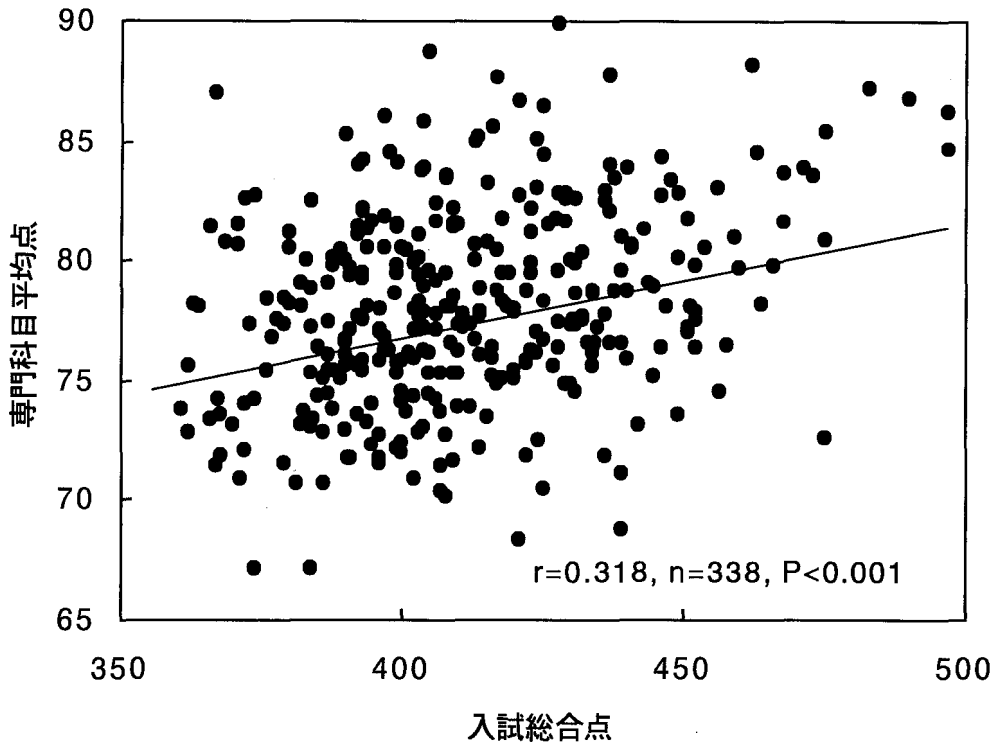


図10 入試総合点と専門科目の平均点との相関

表5 入学試験各科目の得点と入学後の成績との相関

| | 国語 | 数学 | 英語 | 理科 |
|---------|---------|----------|----------|----------|
| 一般科目平均点 | r=0.075 | r=0.236☆ | r=0.009 | r=0.089 |
| 専門科目平均点 | r=0.06 | r=0.093 | r=0.158★ | r=0.164★ |

いずれも n=338

☆: P<0.001, ★: P<0.01

おらず、学力試験は個別試験だけなので、これも高校評点と入学試験成績の相関が低い原因と考えられる。

次に、入学試験成績（総合点）と入学後の成績の関係を分析した。分析対象は1995年度までの全入学者から退学者18名、未卒業の留年者5名を除外した338名である。図9、図10に示すように、入学試験成績と入学後の一般教育科目、専門科目成績との間には有意な正の相関がみられた。これは、高校評点と同程度の相関であり、どちらも入学後の成績を予測する指標になりうることを示している。入学試験の各科目ごとの得点と入学後の成績をみると、国語の成績は一般教育科目、専門科目

のいずれの成績とも相関しなかった(表5)。数学の得点は、一般教育科目ともゆるやかな正の相関を示したが、専門科目の成績とは相関を示しなかった。英語の得点は、一般教育科目の成績とは相関しなかったが、専門科目の成績とはゆるやかな正の相関を示した。理科の得点は、専門科目の成績とゆるやかな正の相関を示した。したがって、入学試験の総合点は入学後の成績と相関するが、個々の入試科目の得点は入学後の成績とあまり相関しないと言える。

3) 国家試験との関係

最後に、予定卒業生、留年者（未卒業生5名を除く）について、臨床検査技師国家試験に1回で

合格したかどうかをみてみた。予定卒業者の国家試験合格率は86.2%、留年者の合格率は79.4%で

表6 予定卒業者と留年者の国家試験合格率

| | 受験者数 | 合格者数 | 不合格者数 | 合格率(%) |
|-------|------|------|-------|--------|
| 全卒業生 | 338 | 289 | 49 | 85.5 |
| 予定卒業生 | 304 | 262 | 42 | 86.2 |
| 留年生 | 34 | 27 | 7 | 79.4 |

あり、それほど差がなかった(表6)。高校評点、入試総合点、一般科目平均点、専門科目平均点を比較すると、国家試験不合格者は留年の有無に関係なく合格者に比べて得点が低かったが、有意差はなかった(表7)。

考 察

本研究では、衛生技術学科へ入学した学生を対象に、高校評点、入学試験成績、入学後の学業成績、留年、退学、国家試験の合否について分析した。本学の受験者、入学者の出身地は、すでに刊行された本医療技術短期大学部自己点検・評価報告書に示したとおり²⁾、西日本全域にわたっており、下宿生活を送る学生も多い。4年制学部に比べて過密なカリキュラムの中で、3年間で規定の単位を修得して卒業するには、入学当初から自覚をもって勉学に取り組む必要があり、入学当初に無気力に陥ったり、クラブ活動やアルバイトに熱中すると、勉学中心の生活リズムを取り戻せないまま3年が過ぎてしまう危険がある。

1) 退学者、留年者について

今回の分析結果でまず目につくのは、退学者、留年者が全入学者のそれぞれ5%、10.8%にのぼることである。退学は、学生自身にとっても好ましいことではないし、経済的、時間的にも無駄であり、極力避けなければならない。とくに、開学後5年間は進路変更を理由に退学する者がかなり

あった。進路変更の理由は、単に4年制大学へ行きたいだけの場合もあったが、本学の授業内容や臨床検査技師という職業が志向に沿わなかったと思われる例もあった。したがって、臨床検査技師という職業や国家資格を得るために必要な学習内容を受験生によく知ってもらふ努力が必要である。この点、公開説明会やホームページによって以前より臨床検査技師についての予備知識が広まり、こうした退学者が減りつつあるのは好ましいことである。しかし、18歳という年齢で自分の志向や適性を判断するのは困難な場合も多く、入学後柔軟な進路選択ができるような制度を造る必要がある。逆に、他の学部へ入学したものの、その後コマメディカルの道へ進みたいと希望する者に対しても積極的に受け入れることを考えるべきであろう。

留年の理由も多様であった。開設当初は、上位の成績で入学しながら、学習意欲を失って無気力になったり、アルバイト・課外活動に熱をあげ過ぎたために留年する例が多かった。これに対し、1991年度以降は、留年者の高校評点や入試成績が低くなっており(表3)、本来の学力が低いために留年する例が増える傾向がうかがわれる。表3に示したように、入学者の平均高校評点、入試の平均点は開設当初からほとんど変わっていないのに、実習や卒業研究で理解力、応用力に乏しい学生が増えつつあるのはこのためかもしれない。しかし、入学後の成績を入学年次ごとにみると、一般教育科目、専門科目の成績にはほとんど変化がなかった。これは、試験成績が全体的に悪いと、どの教官も講義や試験の内容をやさしくする傾向があり、特に最高得点が低いと再試験等でどうしても問題をやさしてしまうためと考えられる。

2) 入学者の学力低下の要因と対策

こうした入学者の均質化と平均値には現われにくい微妙な学力低下の原因はいくつか考えられる。

表7 国家試験合格者と不合格者の成績の比較

| | 高校評点 | 入試総合点 | 一般科目平均点 | 専門科目平均点 |
|------|------------|------------|----------|----------|
| 合格者 | 4.14±0.39☆ | 413.3±26.1 | 78.6±3.4 | 78.7±3.9 |
| 不合格者 | 3.92±0.4★ | 400.4±24.7 | 76.5±3.3 | 74.7±3.4 |

☆：平成3年度以降入学の162名

★：平成3年度以降入学の28名

第一は、開設当初は受験する側もどんな学校か、どれくらいの成績なら合格するか分からず、成績の良い学生も受験するが、年数が経つと受験生も進路指導教官も試験内容に合わせて勉強をし、合格水準に見合った学生を受験させるようになることである。第二は、4年制の保健学科が徐々に増え、コメディカル志望の学生で成績の良い者が保健学科へ進学するようになったことである。今回はデータに示さなかったが、開設当初は薬学部、理学部、工学部、農学部との併願者が多かったのに対し、最近では保健学科や看護大学に併設された衛生技術学科との併願者が増えている。受験生の学力均質化は、将来どの職種に就きたいかではなく、学業成績をもとに進路を決める現在の進路選択、進路指導を更めることなしには解決しない。また、臨床検査技師志望者は、本学の学力試験問題に的を絞って勉強をしてきていると考えられる。そのため、入学試験成績は変らないが、入学後の理解力や応用力が要求される授業や卒業研究では、入試成績に比べて能力が低い印象を受けられる。受験生の4年制志向の問題は、4年制保健学科を新設する以外に解決方法がないが、4年制になっても、単に4年制大学へ進みたい学生ではなく、はっきりした目的をもった学生を選抜することが、留年や退学を防ぎ、活気ある大学造りにつながると考える。この意味では、推薦入学や社会人特別選抜等志向性と適性を重視した選抜のほうが良いかもしれないが、実際には5年、10年の実績を積み上げてみなければ分からない。面接を重視することもひとつの方法であるが、面接する側にそれだけの炯眼がなければ、あまり意味がない。ちなみに、本研究の分析対象となった学生にはすべて面接試験を行ったにもかかわらず、実質入学辞退者や転学者がかなりいた。

3) 入学後の学習意欲の喚起と魅力ある大学造り

高校評点と入学試験成績はそれほど高い相関はみられなかったが(図6)、高校評点、入学試験成績それぞれと入学後の一般教育科目、専門科目の成績との間にはある程度の有意な正の相関がみられた(図7, 8, 9, 10)。これは、日頃の印象とは少し異なる結果であり、高校評点や学力試験は

入学後の成績に反映されることを示している。したがって、学力試験を課すことや推薦入試で高校評点を参考にすることは、それなりの意味があると考えられる。しかし、学力試験の個々の科目の得点と入学後の成績との相関は無いが、非常に低く、今後問題内容等検討すべき課題があると言える。

一般教育科目の成績と専門科目の成績には、高校評点や入学試験成績と入学後の成績以上に強い正の相関がみられた(図5)。これは、入学当初の学習への取り組み態度がそのまま卒業時まで影響することを示している。学生が学習意欲を失う理由は、勉強疲れ、アルバイト・課外活動への熱中、病気や学校への不適応といったの学生側の要因だけでなく、カリキュラム、講義や実習の方法・内容等教育システムや教授する側の要因も関与すると考えられる。岡山大学学生部がまとめた「学生生活実態調査報告書」によれると³⁾、学生が講義に出ない理由としてもっとも多いのは「魅力がない」であり、授業が満足できない理由としては「興味がもてない」と「教え方に工夫が足りない」が圧倒的に多い。また、選択科目を決める基準としては、「テーマや授業内容」がもっとも多く、「専門課程での勉強に必要」を上回っている。この調査結果は、入学したものの魅力のない、期待はずれの授業や、何の役に立つかわからない授業で学習意欲を失う学生がかなりいることを示しており、教授する側も担当科目の意義と学習目標を理解させ、魅力ある講義を行う工夫が必要である。また、入学後早期に目的意識と問題意識をもたせ、自主的に勉強する姿勢を身に付けさせることも重要と考える。入学者から脱落者や不適応者がでるのは避けきれないことではあるが、大学が大衆化し、入学者が多様化するほど、学生の興味と意欲を喚起する努力が重要になり、それが魅力ある大学造りと教育目標の実現につながると思われる。

文 献

- 1) 大学審議会：平成12年度以降の高等教育の将来構想について、1997
- 2) 岡山大学医療技術短期大学部：自己点検・評価報告書

一現状と課題一，1994

- 3) 岡山大学学生部：第1回学生生活実態調査報告書，
岡山大学学生部，1995

(Original)

A study on the correlation between the results of entrance examination and the academic record of the students in the department of laboratory technology

Motoi OKAMOTO, Junko SAKIYAMA and Kazuya AKATSUKA¹⁾

Abstract

The correlation between the school record in high school, result of entrance examination and the academic record, failure in promotion and withdrawal from school was examined in 361 students entered into department of laboratory technology from 1987 to 1995.

1) Thirty-nine students (10.8%) had failed in promotion, and 18 students (5%) had leaved from the school. The reason of withdrawal was refusal in 6 cases, and 4 students had changed their course to other universities. These cases were more frequent in the period until 1990 than in the period after 1991.

2) There were no differences in the school record in high school and the result of entrance examination among students who graduated scheduled period of attendance (regular students), those who failed in promotion, and those who had leaved the school. However, the students who failed in promotion had got higher score in entrance examination than regular students in 1987 and 1988. In contrast, regular students had got higher score in entrance examination than the students failed in promotion in 1991 and 1993.

3) The school record in high school could be cheked during the period from 1991 to1995. In this period, the students failed in promotion had got lower score in high school than regular students. Especially, the difference was significant in 1991 and 1993.

4) There was a significant positive correlation between the results in examination of general subjects and those in examination of technical and proffesional education.

5) The school records in high school had relatively weak positive correlation with the results of entrance examination. In contrast, both the school record in high school and result of entrance examination had clear positive correlations with both the results in examination of general subjects and technical and proffesional education.

6) However, the result of each subject of entrance examination, i.e. Japanese, Mathematics, English, and Science, had no or weak positive correlation with both the results in examination of general subjects and technical and proffesional education.

7) The students who had not passed the national examination of laboratory technologist had lower score in school record in high school, entrance examination, examination of general subjects and technical and proffesional education, but the diffenreces were not statistically significant.

The results of the study indicate that there were students who failed in promotion or leaved school despite their excellent ability during four years following the establishment of School of Health Sciences, but thereafter the ability of students gradually became homogeneous and increased

the students who failed in promotion because of insufficient ability. The highly positive correlation between the results in examination of general subjects and those in examination of technical and professional education indicate that the results of examination in the first year were directly reflected in the results of examination in second and third year, and that it is important to encourage the students's motivation and volition to study with ardor immediately after the entrance. The positive correlation of school record in high school and result of entrance examination with academic record after the entrance implicate the potential usefulness of school record in high school and result of entrance examination in determining the eligibility to enter the school. However, it is desirable to improve the subjects and problems of entrance examination because the result of each subject of entrance examination was poorly reflected in the academic record.

Key words: school record in high school, result of entrance examination, academic record, failure in promotion, withdrawal from school

Faculty of Health Sciences, Okayama University Medical School
1) Fukuyama Medical Laboratory